

乳幼児家庭の教育力向上事業基本研修 兼 令和元年度 第1回 家庭教育支援スキルアップ研修

7月30日（火曜日）大阪府立男女共同参画・青少年センター（ドーンセンター）ホールにて「乳幼児家庭の教育力向上事業基本研修 兼 令和元年度 第1回 家庭教育支援スキルアップ研修」を開催しました。京都大学大学院教育学研究科 森口 佑介 准教授を講師にお招きし、「非認知能力」（※）の基本的な内容について、ご講演をいただきました。

（※）非認知能力は、粘り強さ（忍耐力）や、がまんする力（自制心）、人と関わる力などで、「社会情動的スキル」や「社会情緒的コンピテンス」とも言われています。この力は、乳幼児期から育まれ、子どもが未来に向かって成長していくために、とても重要であると言われています。

1. 日時 令和元年7月30日（火曜日）14時00分～16時15分
2. 会場 大阪府立男女共同参画・青少年センター（ドーンセンター）ホール
3. 参加者 親学習リーダー、訪問型家庭教育支援チーム員、幼稚園・保育所・認定こども園の教職員、小・中・高・支援学校の教職員、民生委員・児童委員、その他家庭教育支援や子育て支援に関わっている方、市町村行政関係者（約500名）

1. 講演 「今注目の『非認知能力』とは？ どうやって育むの？ ～ 子どもたちの『非認知能力』を育む家庭教育を支援するために ～」

講師： 森口 佑介 准教授（京都大学大学院教育学研究科）

乳幼児家庭の教育力向上事業の最初の講座として実施し、「非認知能力」についての基本的な内容についてご講演いただきました。

はじめに、「非認知能力」とは何かということ、これまでは知識や推測する力などのIQで測れる力としての「認知能力」が注目されていたが、認知能力ではない力としての「非認知能力」の重要性についても近年注目されている。非認知能力は、自己制御や思いやり、自尊心などで、社会情緒的スキルなどとも言われている。非認知能力は、子どもの将来に影響を与えることや、IQよりも支援や訓練による効果がみられやすい特徴があることなどを説明いただきました。

次に、非認知能力の育成のためには、「安全基地」が重要であることについてお話しいただきました。安全基地とは、安定した親子関係など、子どもが困った時や不安な時に寄り添い、探索活動の出発点ともなるところで、親だけでなく、祖父母や保育士などの特定の安心できる大人とも築くことができる。例えば赤ちゃんが泣くなどのサインを出す行動に対して、大人が反応することで育まれることなどについてお話しいただきました。

その他、子どもが1歳頃から「思いやり」を示す行動をすることを動画を用いて説明いただいたり、「自己制御」については、3から6歳頃に一番発達し、幼児期以降も発達することや、子どもの就寝時間、運動や音楽、ごっこ遊び、子どもが自分で考えるような関わり方などが、その育成に影響があることなどをお話しいただきました。



【参加者の感想】

- 非認知能力に関する理論の導入を知ることができました。実践をしてできることを考えていきたいと思えます。
- 普段の保育を通して子どもたちに影響することがあるんだと改めて感じました。家庭環境も様々になっているので、子どもへの接し方、関わり方を職場でも話し合っていきたいと思いました。
- 集団活動が自己制御につながる、自制心の発達によいという内容が印象に残りました。